

令和 7 年度第 1 回人材育成のための意見交換会
議事要旨

1 開催日時

令和 7 年 7 月 16 日（水） 午後 3 時 30 分～午後 5 時 00 分

2 開催場所

広島市役所北庁舎（中区役所）6 階 教育委員室

3 出席者等

(1) 学識経験者・関係団体代表者

深澤 悦子【座長】（広島都市学園大学子ども教育学部子ども教育学科教授）

伊藤 唯道 （広島市私立保育協会 副理事長）

山村 圭司 （広島市私立幼稚園協会 理事・教育研究委員長）

栢木 章子 （広島市保育園長会 副会長）

岡田 幸子 （広島市立幼稚園長会 副会長）

(2) 事務局（広島市こども未来局・広島市教育委員会事務局）

幼保企画課 三宅主幹、岩永主査、森本主事

教育企画課 内田課長補佐、斎藤主事

指導第一課 大下課長補佐、原田指導主事

教育センター 吉川主任指導主事

4 議題（公開）

(1) 令和 7 年度人材育成のための意見交換会について

(2) 園内研修の充実に向けた取組について

5 傍聴人の人数

0 名

6 意見交換会資料名

・令和 7 年度人材育成のための意見交換会について

・こどもを中心として語り合う園内研修

7 出席者の発言要旨

議題に関する事務局の説明に対し、以下のような意見・質問があった。

※ ○は学識経験者・関係団体代表者、●は事務局、それぞれの発言を表す。

○ 幼保小接続に関する内容をこの冊子に加えるならば、ボリュームが増加することもあるのか。

● 可能である。

- まず、皆様の園では、幼保小連携の取組として、どのような取組をしているのかをお聞きしたい。
- 自園の所在する小学校区では、小学校教諭が夏休み期間中に近隣の幼稚園、認定こども園、保育園を訪問し、保育参観する。その際、近隣の園の保育者も保育参観することが可能である。そして、参観後にカンファレンスを30分するという取組をここ数年続けている。幼稚園は、夏休みがあるため、難しいといった声もある。
- その中では、どのような話し合いになるのか。
- 話の内容は、参観に訪れる小学校教諭の担当学年、就学前の教育・保育の理解度などにより異なる。最近では、就学前の教育・保育にこれまで触れてこられなかった高学年の小学校教諭があえて参観に訪れる。そのため、保育者は就学前のこどもの育ちについて伝えている。伝えた内容に深く共感し納得する小学校教諭もいるが、そういった教諭ばかりではない。
- 小学校教員と保育者による交流活動ということか。
- この取組の一番の目的は、こどもについて話す機会を大切にすることである。
また、今後、新たな取組として、私が小学校の校内研修で就学前の教育・保育について話をする予定である。当日は、小学校からの依頼内容を踏まえつつ、小学校教諭では分からない年長の保育や、これからスタートカリキュラムの修正について話す予定である。
- こうした取組を3、4年続けてきて、何か感じることはあるか。
- 課題としては、保育参観やカンファレンスしたことが、カリキュラムに繋がっておらず、小学校教諭へ理解を促すところで留まっている。そのため、今度の校内研修では、カンファレンスの内容を次につなげるということについて伝える予定である。
- 保育参観とカンファレンスは年に何回くらい実施しているのか。
- 小学校の近隣に園が3園あるので、3回実施している。それに加え、小学校で幼保小連携会議があるため、園の保育者が小学校を訪問する機会もある。6月には、児童の姿を見てその後に話をするが、次につながっていないという課題がある。勿論、こどものことについて情報交換するが、それをスタートカリキュラムにどう反映するのかには至らない。
- 広島市で一斉にスタートカリキュラムを作成した時期があった。そもそも、スタートカリキュラムとアプローチカリキュラムを園と学校で別々に立てていたということが課題である。

- アプローチカリキュラムは、随分前から広島市内で作成していた。
- 本来ならば、小学校と近隣の幼稚園、保育園、認定こども園が一緒になってカリキュラムを作成していくことが望ましい。
- 小学校教諭は多忙であるため、時間が無いとよく聞く。
- 広島市内には平成27年度から2年間、広島県幼保小接続カリキュラム研究開発事業の指定を受け、先行的に幼保小連携に取り組んだ学区がある。この学区では、園と学校がこどもの姿を中心にして、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムを一緒に作成した。このように、県や市から指定を受けてその時期に充実したカリキュラムの作成がなされた学区がいくつかある。しかし、その後、時間の経過とともに、カリキュラムが形式的なものとなり、こどもの姿に合わないものになっていないだろうか。
そのような中、先程紹介のあった3～4年続けている学区の取組は興味深い。
- 時間がかかったが、どの園も行き来できるようになり、幼保小連携会議において、互いにカリキュラムを確認するようになってきた。
- 学区でテーマを決め、年3回程度、取り組むといった進め方もよいかもしれない。
- 一応、幼保小のテーマは決まっているが、学校が立てているものであり、園と学校で話し合いテーマを立てたものではないので、まずは、一緒に話し合うという所から始めなくてはならない。
- 私の園が所在する学区は、私立の園が無いので、公立の幼稚園・保育園と小学校が連携している。
3年前から、園へ行こう週間で7月に保育園が保育を公開し、小学校教諭と幼稚園教諭が保育参観している。その際、保育者がその日の保育について説明し、参加者が協議する時間を設けている。
幼稚園は、夏休みがあるので、11月頃に実施する園へ行こう週間の期間中に小学校教諭と保育士が保育を参観に訪れる。高学年や専門教科を担当する小学校教諭の訪問が多い。低学年の小学校教諭はクラスを空けることが難しいようで参加が少ない。自園も、保育参観後、小学校教諭との協議では、小学校教諭から「環境構成や保育者によるこどもへの声掛けなどが参考になる。」との感想をもらった。
6月に、小学校の授業参観へ行ったが、参観後の協議が無いので残念だった。保育者の立場から伝えたい気づきや感想、聞きたいこともあるので、少しでも協議の時間を設けてほしいと感じた。しかし、学校が多忙なことを考えると、学校へのお願いは躊躇するが、今後、相談していきたい。
- 小学校においても働き方改革を進めていることなどから、園からの声掛けを躊

踏み、踏み込めない気持ちも分かる。今、紹介いただいた取組も2年から3年くらい前から始めたのか。

- 幼保小連携の研究園・校や指定園・校ではそういうこともある。今年度も5つの学区が研究校として取組を行っている。

研究園・校では、大学教授の先生を招き、小学校と市立幼稚園、近隣の私立幼稚園や保育園の職員が話を聞き、理解を深める。そういう情報を聞き、どの地域でもそういった取組ができるといいと感じた。

- 小学校から研修会の声掛けなどを受けることはあるか。

- 幼保小連携の研究校や指定校ではそういうこともある。今年度も5つの学区が研究校として取組を行っている。

研究校では、大学教授の先生を招き、小学校と近隣の幼稚園や保育園の職員が話を聞き、理解を深める。そういう情報を聞き、どの地域でもそういった取組ができるとよいと感じた。

- 自園では、私が転勤して来た3年前よりも以前から、接続カリキュラムの交換を園と小学校で行っている。また、4月の2週目に、小学校から声を掛けていただき、スタートカリキュラムの実施状況について説明を受けた。また、夏は、学区内にある保育園と認定こども園を小学校教諭が訪問し、保育参観後にカンファレンスを実施している。

昨年度は、小学校教諭と一緒に、保育中に見た子どもの姿から10の姿について考えた。その際、小学校教諭は、10の姿の理解が難しかった。こどもが活動中に見せる探究の姿については、大変注目されていて、その力が教科学習のどの位置に繋がるのかということは語られる。しかし、10の姿に示される言葉とは別の言葉で語っておられた。

小学校教諭と栽培について話す機会があった。その際、その小学校教諭が「学校ではとにかく失敗をさせたくない。」と言っていた。その理由を聞くと、うまく育たなかった場合、保護者対応に繋がるケースがあるとのことだった。また、児童が植物を同じ期間で同じように育て、持ち帰ることを目的としてしまうため、こどもたちが育てている植物が枯れそうになっても、その理由をこどもが調べ、どうすれば枯れないのかということを親に聞いたり、自ら考えたりする時間もないとのことだった。この話を聞き、こどもはそういった時間にこそ学びがあり、勿体ないと感じた。小学校教諭は「保育園では、シラバスに沿って進めなくてはいけないというのではなく、時間を十分保障できるところがいいところですね。」と言っていた。ただ、ここ2、3年は、保育園でこどもたちが遊んでいた遊びを授業の中で生かされていることが分かる。例えば、理科の授業にシャボン玉遊びを取り入れ、体育科の授業に砂場遊びの要素を取り入れるなど、こどもの興味を授業に生かすよう取り組んでいただいている。

小学校へは、就学前の保育で、こどもたちにどのような力を育てたいのか、どのように心情を育ててきたのかということ伝えていきたい。

働き方改革によって、学校との交流が全く無くなったという地域もある。その

ため、園に学校の先生をはじめ、色々な立場の方をお呼びして、こどもの姿からこどもの力について一緒に考える機会を設ける必要性を感じる。

- 自園においては、交流会をはじめ、幼保小連携の取組を随分前から続けている。有意義だと感じるのは、園と学校の職員が互に行事等を行き来する中で、園児と職員が小学校の先生の顔や名前を認識することができるので、安心に繋がることである。仕方ないことだが、幼保小連携の担当者が毎年変わるので、よいものを継続していくという点では、難しさもある。今年は、カリキュラムのさらなる充実についても取組を進めていくようになると考えている。

少し視点が変わるが、今、民生委員をしていて、学校協力委員として学校に関わる機会がある。学校が授業を公開する際には、よく参観させていただいている。地域の意見を聞くことや幼保小連携をしながら、日頃の授業だけではなく、色々な行事に取り組んでいる小学校の先生方は、とても大変だろうと感じている。

- 学校には、社会に開かれたカリキュラムが求められており、カリキュラムの提示や説明が求められる機会が増えている。そのため、スタートカリキュラムやアプローチカリキュラムを兼ね、地域と一緒に取組を進めていくことができれば望ましい。一つ一つのことを別にして取り組もうとすると、時間を要するし難しくなる。

ここまでは、皆様の自園での取組等の様子をお聞きしたが、園内研修の中でも幼保小接続は大切な視点であると思う。そのため、園内研修にカリキュラムが繋がるような内容があってもよい。そうすると、この冊子の中に、繋がりのあるカリキュラムについての内容が入ることも考えられる。ただ、そうするのであれば入れ方を考えなくてはならない。

- 冊子に、幼保小接続の視点を入れて園内研修で小学校教諭と語りやすくなるのであればよいが、示し方として、カラーゾーンの４段階目というような示し方になると相応しくないと思うので工夫が必要である。

- 小学校教諭と話をするに際にも、今設定している三つのカラーゾーンを踏まえ、語り合いはできる。

- 確かに、保育の質の向上へ向けてということと、幼保小接続を充実するということの両方にも、３つのパターンが使えるかもしれない。

- 小学校教諭と一緒に園内研修できるというのはよい。

- 幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿について、小学校教諭の理解が薄いという話はよく聞かすが、３つの資質・能力の繋がりについては、十分な理解があるのだろうか。

- 小学校教諭がこどもの具体的な姿を見て、資質・能力との結びつきを想像する

ことについては、幼稚園教諭・保育士から学べることが多い。具体的なこどもの姿から目指したいゴールの姿を思い描き、今何をすべきなのか、どのような力を育むべきなのか、そういったことを幼保小の教師が、どのようにすれば身に付けられるようになるのかを指導第一課として考えている。

資質・能力について、具体的なこどもの姿と往還しながら繋げて考え、捉えられるようになることが課題である。

- 学校教育には、単元とそのねらいがあり、そこへ向けて授業することを重視する。幼児教育・保育もねらいはあるが、日常の遊びや生活のプロセスを重視しており、重視している部分のイメージが学校教育と幼児教育・保育では異なる。この違いをカリキュラムで繋ぐのは大変である。そういったところも幼保小で話し合い、よい方向へ進められるといいのだが。

- カリキュラムで考えると、核になるのは保育内容と教科内容である。この二つであれば、資質・能力を共通にしながら繋ぐことが可能である。

例えば、園と学校で扱われている共通教材も多くある。絵本で言えば、『おおきなかく』『スイミー』『はなのみち』『にゃーご』『おにたのぼうし』『注文の多い料理店』『海の命』などがある。これらについて、幼児教育・保育段階では、イメージやストーリーを楽しむといった力がこどもに育まれる。小学校教育においては言語化され、文法や文章の構成などとともに人間の機微を学び、単元ごとに学力として定着していく。そういった繋がり、カリキュラムにすると見えやすい。

さらに、低学年の生活科においては、こどもが幼児期に経験してきたことと重複する部分が多い。こどもの姿、保育内容、教科内容で話ができれば繋がりやすくなる。

幼保小接続の視点で、小学校教諭と保育者が語り合うならば、語り合うものが見えることが重要になる。例えば、学区ごとにここだけは繋げようということが定まるだけでも語り合いが変化していくのではないだろうか。

この冊子の中に、幼保小接続の視点を入れるのであれば、「はじめに」のページも変える必要がある。補足だが、資質・能力の示し方がこれから変わるため、そこも踏まえるとよい。

- 冊子の題名についての変更を考えるのもよい。例えば、「語り合う園内研修」ではなくて、「語り合い、こどもの育ちを支える。」というようにする。そして、全体の流れについては、1部を保育に関すること、2部を学校の学びに関すること、というようにしてもよい。ベースは今の内容を残しつつ、園内研修と幼保小接続のことを入れるやり方もある。

- ここまでは、冊子に幼保小に関する内容を入れることについて意見が出た。ここからは、前回までの意見交換会での意見をまとめた現段階の冊子についての意見をいただきたい。

- 3 ページ目の、(I)保育の振り返りの、「保育の評価や振り返り」という言葉について、幼児教育・保育においては、振り返りのプロセスが評価になるため、例えば、「評価（振り返り）」や「振り返り（評価）」ではどうか。
- 評価には、チェックと改善という意味がある。改善に向けてということであれば評価か振り返りのどちらかでよい。改善は振り返りをしつつ、次の行動、計画へ繋げて、循環させていく。
- 小学校教諭は、「振り返り」よりも「評価」と記載した方が馴染むのだろうか。
- 小学校においても、教師が自身の授業を振り返ることが日常であるため、「振り返り」という記載で問題ない。
- 小学校教諭にとって、「評価」という言葉は成績表に示すような評価のイメージを持つのだろうか。
- 「評価」だけになると、成績表に示すような評価のイメージを持つひともいるかもしれない。自分の授業を改善するのであれば、「振り返り」という言葉の方が馴染みやすいかもしれない。
- それでは、記載する言葉については、「評価」又は「振り返り」のどちらかにする。若しくは、「評価（振り返り）」ということでも検討してほしい。
 その他のことについて、私からもいくつか気づきを伝える。「幼稚園教諭・保育士等の人材育成の基本的な考え方」に記載している目指す保育者の姿を、2 ページ目か3 ページ目に、載せるとよい。また、2 ページ目の始めの段落は、最後に持ってくるとよい。
 園内研修については、インターネットや本など、メディアを調べれば様々な手法が紹介されている。しかし、手法ありきではなく、目の前のこどもを育てるためには、どのような保育者が必要となるのか、どのような保育者を育てるのかというのが園内研修には重要である。そのため、4 ページの一番下の行は「人材育成」ではなく「保育者の育成」という表現の方が馴染むと考えられる。また、人を育てること、人間が豊かになることが園内研修のよいところである。自立して生きて行く一人のこどもを支えるのが保育者である。人間が人間として人間を育てられるための研修であることに繋がるようになるるとよい。
- 冊子の構成の順序について、12 ページから14 ページのチェックリストは、3 つに分けるのではなく、1 つにまとめるとよい。現場において、まずチェックして、どのカラーゾーンにチェックが多くついているのか、又は少ないのかを確認し、それを踏まえてカラーゾーンを選択して園内研修をする流れの方が活用しやすい。簡単にまとめると、カラーゾーンがあることを説明し、その後にチェックリスト、その後に、各カラーゾーンの詳細、そして実践事例、というようになると分かりやすい。

- わたしも、前回の資料を見てそのように感じた。
- 13ページの保育者自身と職員間の振り返りの部分について、③と⑦に「保育中のこどもの姿を踏まえ、環境構成について振り返っている。」と記載している。環境構成を重視することは大切だが、最近は環境構成さえすれば保育ができるといったような捉え方も増えてきたように感じることも多く、懸念している。そのため、③と⑦の「環境構成」は「環境構成・保育内容」と記載するとよい。保育内容があることで、資質・能力に繋がっていく。
もう一つ、14ページに記載のある「大学教授」は、色々な大学の方が園内研修には関わられると思うので、「大学の専門家」、「幼児教育の専門家」、「学識経験者」などの表現のほうが相応しい。
- ブルーゾーンについて、語り合おうということを記載しているが、語り合いの始め方に悩むことが多いと考えられるため、いつ、どこで、どのように、何を、といった語り合いの始め方の具体例を入れるとよい。そうすることで、より語り合いが始めやすくなる。
- 何を語るのかということは、とても重要である。
- 確かに、何を語るのかというポイントは重要である。そして、そこに至るまでには、例えば、「すごいよね」というように、こどもの姿について感じたことを語ることに職員が慣れ、どの保育者も園内で自分の考えを発言できるようになり、風通しのよい園内風土を作っていくことがまず重要になる。
- 園内研修情報を紹介するページにおいて、いつ、どこで、どのように、といったことも確認できるが、語り合いの始め方については、カラーゾーンを記載している前の段階で入れておくともよい。
皆様の園では、語り合いはどのようにしているのか。
- 自園では、よく事務所で語り合いが始まる。ただ、語りっぱなしではなく、何か一つ、根拠を見つけることや次の保育につなげる指標のようなものが生まれることが重要だと考えている。
例えば、今朝も事務所で語り合いが始まり、あるこどもに対して、職員がどのような言葉掛けをしていくとよいかを話していた。その際、「やってみよう。わくわくする。」と声に出す職員がいた。そこが大事だと思っている。ブルーゾーンでは、語り合い、内面にあることを出して消化することが必要になるが、グリーンゾーンでは、こどもを理解して次に何をするのか、何ができるのかといった視点が必要になる。
- 自由に語れるようになれば、自然に今のような視点の語り合いになっていくのではないだろうか。
- 確かにそういった視点になっていくように思う。

- 語り合い、実践した後、それがどうだったのかというところへ進めるとよい。
そのつながりが重要である。園によって、実情が異なるため、職員がどのような子どもを育てたいのかということはある程度共有することは大切である。
- 園内で語り合いが充実してくると、管理職としては、「語り合いで、ある特定の
ことについて学んで、それを次の取組に繋げてほしい。」思うようになる。そこで
気を付けなくてはならないのは、職員が管理職の持っている答えを探すようにな
らないことである。更には、管理職が、最終的に自分の持つ答えをトップダウン
で職員に下ろす形になると、それは主体的な語り合いではなくなる。
自園でも、そういった経験があるので、そうならないように、あえて園長が最
後のまとめをせず、職員が自分たちで考えるという方法を実施している。しか
し、そうすると、自ら気づいて行動できる人もいるが、皆がそういう力を発揮す
るには時間を要するため、悩むところでもある。
- 全体的な計画や年間及び月間の計画に立ち返ることができるという。そして、
実際のこどもの姿と見比べていくことが重要である。遊びの中で、こどもにどの
ような力が育まれたのかを捉え、その遊びの広がりや根拠に、計画に立ち返り、
計画していたことがどのあたりまで進んだのかを捉える。このように、具体的
なこどもの姿と結び付けて立ち返る場所が重要である
- 計画に立ち返る際に気を付けなくてはならないのは、できた、できないとい
った立ち返り方に陥らないようにすることだ。
- そこが専門性を求められる部分になる。
- 何を育てたいか、何をしていくか、何にどう関わっていくのかという所を振り
返るというような考え方ということだろうか。
- おっしゃる通り、そこが大事なのだろうと思う。
そういったものとなるために、今回の意見交換会では、冊子の順序を変更につ
いて、話し合いの仕方について、各カラーゾーンの事例の中に園内研修情報の具
体を入れることについて、意見が出た。その他に何かあれば意見を出してほし
い。
- 語り合う園内風土が充実すれば、少しの時間であっても、語り合えるようにな
るという捉え方もあるので、それをいれるのもよい。
- 各カラーゾーンのマークについて、文字の開始する位置を揃えるとよい。
- 各ページにもマークをのせるとよい。
- オレンジゾーンのマークは、赤が強いので、もう少し黄色に寄せるとよい。

- ブルーゾーンの色と、冊子全体のブルー系統の色が近いので、違いがわかりやすくなるとよりよい。
- こどもの姿を中心として語り合う園内研修なので、サブタイトルに、こどもをつなげる、こどもが繋がる、こどもの育ちが繋がるといった言葉を入れ、幼保小接続のことを入れるのもよい。